



執筆:近藤 好和

一ノ谷合戦を考えるための文献資料

元暦元年(寿永三年、一一八四)二月七日、現在の神戸市域の広い範囲で、源範頼・義経率いる源氏(官軍)が、平氏を打ち破った。これが一ノ谷合戦である。ただし、この名称は通称であり、のちにみるように一ノ谷だけで戦闘が行われたわけではない。しかし、ここでは通称を使っておく。また、一ノ谷合戦の前哨戦として、二月五日に、摂津と丹波の境の三草山で、義経軍と平氏が対戦し、夜襲により義経軍が勝利した。これを三草山合戦というが、ここでは、この三草山合戦を含めて広く一ノ谷合戦とよぶことにする。

こうした一ノ谷合戦を考えるための文献史料としては、九条兼実の『玉葉』、『吾妻鏡』、そして『平家物語』がある。このうち、やはりもっとも信憑性の高いのが、当時の同時代史料である『玉葉』であり、一ノ谷合戦を考えるための文献史料の基本となろう。

いつで、一般論からいえば、後世(鎌倉末期)の編纂物だが公的性格の強い『吾妻鏡』、そして『平家物語』の順となる。ただし、『吾妻鏡』の一ノ谷合戦譚に関しては、『平家物語』に依拠しているという指摘がある。そのためもあって、一ノ谷合戦譚に関しては、『吾妻鏡』は顧みられないことが多い。しかし、『吾妻鏡』には『平家物語』とは相違する記述もあり、しかもその相違の部分は、『平家物語』よりも現実味があると考えられるのである。

とりわけ、一ノ谷合戦といえば、義経によるいわゆる「坂落とし」の問題が大きくクローズアップされる。「坂落とし」のことは『玉葉』には記されておらず、『吾妻鏡』と『平家物語』に記されている。そこで、これまで「坂落とし」といえば、『平家物語』中心に考えられてきた。

しかし、『平家物語』の一ノ谷合戦譚には個々の記述(とりわけ地名など)に矛盾があり、また戦闘の行われた神戸市域すべてを一ノ谷とよぶような作為もある。一ノ谷合戦という通称も『平家物語』からきているわけだが、そのため、『平家物語』を中心に考えると、かえって問題は混乱する。言い換えると、これまで「坂落とし」の問題はいろいろと議論されて結論が出ていないけれど、その混乱の原因は『平家物語』中心に考えてきたことにあったと考えられる。

そうしたなかで、『吾妻鏡』の一ノ谷合戦譚を改めて見直してみると、じつは『平家物語』と相違する部分に、「坂落とし」の問題を考えるための鍵があるように感じられる。そこでここでは、一ノ谷合戦のうち「坂落とし」の問題に焦点を当て、『玉葉』と『吾妻鏡』の分析を中心に据えてみていきたい。

合戦前の動向

本題に移る前に、源平両軍の合戦前の動向を簡略に示しておこう。

まずは平氏。寿永二年(一一八三)七月に都落ちした平氏は、まず福原に入り、そこを焼き払った後に九州に向かう。しかし、九州を追われ、その後、讃岐の屋島に入った。それ以後は勢力を盛り返し、木曾義仲や源行家などの追討軍を打ち破り、翌元暦元年正月頃には、ふたたび福原に入り、上洛の機をうかがっていた。

一方、源氏は、正月二十日に木曾義仲を追討し、二十九日には平氏追討に出立する。木曾義仲追討から出立までの間、朝廷では、平氏追討か、和平により、都落ちの際に平氏が持ち去った三種の神器を無事に返還させるかで、意見が分かれており、和平の使者さえ送ろうとした。そうしたジレンマのなかでの出立であったが、源氏は、範頼軍が大手として、海岸沿いの山陽道を進み、義経軍が搦手として、北の丹波路の山中を迂回する作戦を取ったのである。

1. 『玉葉』にみえる一ノ谷合戦

原文と要約

では、『玉葉』からみていこう。『玉葉』にみえる一ノ谷合戦に直接関わる記事はつぎの兩日条である。まずは原文を読み下して示そう。

○元暦元年二月四日条

源納言示し送りて云ふ、平氏主上を具し奉り、福原に着きおわんぬ、九国いまだ付かず、四国・紀伊国等の勢数万と云々、来る十三日一定入洛すべしと云々、官軍等手を分くるの間、一方僅かに一、二千騎過ぎずと云々、天下の大事大略分明と云々、

○元暦元年二月八日条

未明人走り来りて云ふ、式部権少輔範季朝臣の許より申して云ふ、この夜半ばかり、梶原平三景時の許より飛脚を進めて申して云ふ、平氏皆悉く伐り取りおわんぬと云々、その後午刻ばかり定能来り、合戦の子細を語る、一番に九郎の許より告げ申すく搦手なり、まづ丹波城を落とす、次いで一谷を落とすと云々、次いで加羽の冠者案内を申すく大手、浜地より福原に寄すと云々、辰の刻より巳の刻に至る、猶一時に及ばず、程なく責め落としおわんぬ、多田行綱山方より寄せて、最前に山手を落とさると云々、大略籠城中の者一人も残らず、但しもとより乗船の人々四五十艘ばかり島辺に在りと云々、廻らし得べからざるにより、火を放って焼死しおわんぬ、疑ふらくは内府等かと云々、伐り取る所の輩の交名いまだ注進せず、よって進らずと云々、劍璽・内侍所の安否、同じくもっていまだ聞かずと云々、

四日条によれば、両軍の勢力は、平氏は四国と紀伊の軍勢を合わせて数万、一方の源氏は、大手・搦手の二軍に分けたので、一方で一・二千騎にすぎなかったという。このことを兼実が報告した源納言(源定房)は、「天下の大事大略分明」(すでに勝負はついた)と諦観をもらしているが、軍勢では平氏が圧倒的に有利だったらしい。

八日条は一ノ谷合戦の戦況報告である。これによれば、九郎つまり義経が搦手として、丹波城と一谷(一ノ谷)を攻略し、加羽冠者つまり範頼が浜地(海岸)から福原を攻めたという。戦闘は、辰刻(午前八時前後)から巳刻(午前十時前後)までで、一時(二時間)も経たないうちに終わっただけ。また、多田行綱が山方から最前(最初)に山手を攻略したという。平氏は「大略籠城中の者一人も残らず」という有様であり、壊滅的な打撃を被ったらしい。また、平氏は上陸せずに船にいた人々もあり、四・五十艘の船が島辺(経が島辺)にあったが、船をめぐる事ができず、火を放ち焼死したという。それは平宗盛達であったかという。しかし、いまだ合戦で討ち取った人々の交名(姓名)は届いておらず、また、神器の安否も不明であった。

つまり八日条によれば、平氏は、丹波城・一ノ谷(搦手)・浜地・福原(大手)・山手・島辺(経が島)に布陣しており、義経が搦手としてまず丹波城、ついで一ノ谷を攻略し、範頼が大手として浜地から福原を攻撃し、行綱が山手を攻略したことになる。このうち丹波城を攻略したというのは、三草山合戦のことに相違ない。また、山手(山の手)に平氏が布陣していたことは、『平家物語』にもみえるが、そこを行綱が攻略したことは、『玉葉』の独自記事である。

なおうえで、義経・行綱は「攻略」、範頼は「攻撃」と語句を使い分けたことには意味がある。つまり『玉葉』では、義経や行綱は一ノ谷や山手を「落」(落とした)とあるのに対し、範頼は福原に「寄」(寄せた)とあるからである。範頼軍は福原を攻撃はしたが、攻略はしていないらしい。以下でも、この解釈に基づいて、語句を使い分けていく。

ところで、多田行綱は、摂津源氏出身で摂津多田荘を本拠地として京都で活動している京武者である。治承元年(一一七七)、藤原成親らが平氏転覆を策した鹿ヶ谷の密議に参加していたが、それを清盛に密告したことで有名である。その後は、平氏・義仲・義経と時の権力者を次々と渡り歩き、日和見主義の典型とまで言われている人物である。この時は義経に協力しているが、のちには義経にも反旗を翻す。

2. 『吾妻鏡』にみえる一ノ谷合戦

原文と要約

ついで『吾妻鏡』の一ノ谷合戦譚をみよう。それは二月四日・五日・七日条が中心となる。やはりまず原文の読み下しを示そう。

○元暦元年二月四日条

平家日来西海・山陰両道軍士数万騎を相従へ、城郭を撰津と播磨の境の一谷に構へ、各群集す、

○元暦元年二月五日条

酉の剋、源氏両将撰津国に到る、七日卯の剋をもって、箭合の期と定む、大手の大將軍は蒲冠者範頼なり、相従ふの輩、(交名省略)、已下五万六千余騎なり、搦手の大將軍は源九郎義経なり、相従ふの輩、遠江守義定・(中略)・三浦十郎義連・(中略)・平山武者所季重・(中略)・熊谷次郎直実・同小次郎直家・(中略)、已下二万余騎なり、平家この事を聞き、新三位中将資盛卿・小松少将有盛朝臣・備中守師盛(中略)已下七千余騎、当国三草山の西に着く、源氏また同山の東に陣す、三里の行程を隔て、源平東西に在り、爰に九郎主信綱・実平の如きに評定を加へ、暁天を待たず、夜半に及びて三品羽林を襲ふ、よつて平家周章分散しおわんぬ、

○元暦元年二月七日条

雪降る、寅剋、源九郎主、まづ殊なる勇士七十余騎を引き分け、一谷の後山に着く<鶴越と号す>、(熊谷・平山抜け駆け譚省略)、その後蒲冠者ならびに足利・秩父・三浦・鎌倉の輩等競ひ来る、源平の軍士等互いに混じり乱る、白旗赤旗色を交ふ、鬪戦の為躰、山に響き地を動かす、彼の樊張良と雖も、輒く敗績し難きの勢ひなり、しかのみならず城郭、石巖高く聳へて駒蹄通ひ難く、澗谷深くして人跡已に絶ゆ、九郎主三浦十郎義連已下の勇士を相具し、鶴越<この山猪・鹿・兎・狐の外は通はざるの陰阻なり>より、攻め戦ふの間、商量を失ひて敗走す、或は馬に策ち一谷の館を出て、或は船に棹し四国の地に赴く、(重衡生け捕り・通盛討ち死等省略)、薩摩守忠度・若狭守経俊・武蔵守知章・大夫敦盛・業盛・越中前司盛俊、以上七人は、範頼・義経等之軍中討ち取る所なり、但馬前司経正・能登守教経・備中守師盛は、遠江守義定これを獲る、

四日条によれば、平氏の軍勢は数万騎であり、撰津と播磨の境の一谷(一ノ谷)に城郭(一ノ谷城郭)を構えたという。

ついで五日条。源氏はその日の酉刻(午後六時頃)に撰津に到着し、七日卯刻(午前六時前後)を「箭合」(戦闘開始)の時刻と定めたという。源氏の軍勢は、大手の範頼軍が五万六千余騎、搦手の義経軍が二万余騎であり、義経軍には、遠江守義定(安田義定)・三浦義連・平山季重・熊谷直実・直家等が従っていた。

そして五日条は、三草山合戦の記事に移る。平氏は、平資盛等の軍勢七千余騎を派遣し、三草山の西に布陣し、一方、義経軍は同じく東に布陣した。両軍は三里(十二キロ程)を隔てて対陣した。義経は、田代信綱や土肥実平等に相談のうえで、平氏軍を夜襲して潰走させた。

なお、田代信綱や土肥実平は、頼朝から義経の補佐役として付けられた鎌倉御家人であり、義経同様に頼朝の代官である。また、三草山の推定地は、現在の兵庫県加東郡社町と大阪府豊能郡能勢町(兵庫県川辺郡猪名川町との境)の二箇所がある。

ついで七日条は一ノ谷合戦の本戦の記事である。その日は雪だったらしい。寅刻(午前四時前後)、義経は、軍勢のなかから勇士七十余騎を選び、「一谷の後山<鶴越と号す>」、つまり一ノ谷城郭の背後にそびえる「鶴越」という山に着いた。この七十余騎は義経軍のなかでも特に選りすぐりの勇士である。

その後、引用は省略したが、この義経軍から平山季重・熊谷直実・直家が密かに抜け駆けし、一ノ谷城郭の前路を迂回して、海岸沿いに一ノ谷城郭に迫った。そして、源氏の先陣であることをその姓名とともに声高に名乗った。この直実・季重の挑発に平氏が応じるかたちで、一ノ谷城郭での戦闘が始まったのである。

その後は、範頼と足利・秩父・三浦・鎌倉等の武士達も加わり、源平入り交じった大乱戦となり、一進一退で容易に決着の付かない状態となった。しかも一ノ谷城郭は、岩石が高くそびえて馬が通えず、谷川が深く人も通えない要害の地にあった。つまり源氏は一ノ谷城郭を攻め倦んだのである。

この状況をおそらく「鶯越」の山上からながめていたであろう義経は、三浦義連以下の勇士とともに、猪・鹿・兎・狐以外は通わないという「険阻」(峻険)の「鶯越」から攻撃に出た。『吾妻鏡』には直接記されていないが、険阻からの攻撃ということであるから、それが「坂落とし」をいつていることは間違いないであろう。これに平氏は一気に崩れた。馬で城郭から逃げ出す者、船で四国を目指す者と様々であった。

この合戦で平重衡は捕虜となり、平通盛・忠度・経俊・知章・敦盛・業盛・越中盛俊等七人が義経・範頼に、平経正・教経・師盛等の三人が安田義定に討ち取られた。

なお、安田義定は、甲斐源氏の出身であり、水鳥の羽音に驚いて平氏が敗走したという治承四年(一一八〇)十月の富士川合戦でも大きな働きをし、また、木曾義仲に同行して入京するなど、頼朝に対して独立性も強かった人物である。

また、七日条によれば、義定が討ち取った人々のなかに能登守教経(平教経)の名前がみえる。これは『吾妻鏡』二月十五日条にもみえ、『吾妻鏡』では、教経は以後の合戦には出てこない。しかし、『平家物語』では、教経は以後の合戦で大きな活躍をし、壇ノ浦で入水する。教経が一ノ谷で討ち死にしたのならば、『平家物語』での教経の活躍はまったくの虚構ということになる。しかし、それは考えづらい。

そもそも教経の生存は、平氏の首が都大路を渡されるなか、「渡さるるの首の中、教経においては一定現存と云々」と『玉葉』に記されている(二月十九日条)。この「現存」は教経の首が確かにあったという意味にも取れるが、やはり教経の生存を確認したという意味であろう。生存が確認されたということは、死亡説もあったことの裏返しであるが、教経が一ノ谷合戦で討ち死にしたというのは『吾妻鏡』の誤報であるらしい。

『吾妻鏡』の解釈

以上の『吾妻鏡』のうち、七日条を解釈してみよう。

まず大手の範頼軍の動向は記されていない。一方、搦手の義経軍は、三草山合戦の後、軍勢が三分割されたと考えられる。つまり義経が勇士七十余騎を率いて一ノ谷城郭の後山である鶯越に向かい、そのなかから熊谷・平山が抜け駆けして一ノ谷城郭の、おそらく正面(地理的には西側)に向かった。そこは義経軍が本来向かうべき所であり、義経が抜けた残りの本隊もそこに向かったものと考えられる。つまり義経軍は、後山と正面(西側)の二方向から一ノ谷城郭を攻撃したという考えが成り立つ。

そして、ここが解釈のひとつのポイントだが、義経が抜けた残りの本隊は誰が指揮したのであろうか。そこで注目されるのが、義経・範頼とともに軍功者として名前が出てくる安田義定である。義経の抜けた本隊を指揮して一ノ谷城郭の正面に向かったのは、安田義定ではなかろうか。逆にだからこそ軍功者として名前が出てくるのであろう。

一方、四日条によれば、一ノ谷城郭は摂津と播磨の境にあった。とすれば、その位置は、現在の神戸市須磨区、昭和五年(一九三〇)に一ノ谷町と命名されたという地域以外には考えられない。しかもこの位置に城郭を構えることは、神戸市の地形から戦略的に考えても納得がいく。

というのも、神戸市は、北側には六甲山系が連なり、南側は海という、海山に挟まれた東西に長い地形である。そこを防衛する場合、やはり東西の海山に挟まれて地形がもっとも狭くなった場所に防衛施設を設置するのがもっとも有効であろう。あとは北の山側の谷筋にいくつかの防衛施設を設置すれば、陸路からの攻撃は防げたはずである。海上からの攻撃もできるが、当時の源氏軍にはまだ水軍はないし、平氏は陸上だけでなく、海上にも船を浮かべていた。

そこで神戸市の地図をみると、鉢伏山が北に張りだして海に迫った須磨浦公園付近が、神戸市の西側ではもっとも地形が狭い地点となっている。したがって、その背後の一ノ谷は防衛施設を設置するのに最適な場所といえる。

そして、一ノ谷城郭が須磨区にあったとすれば、その後山とは、現在の鉢伏山や鉄拐山ということになる。そこは断崖で谷川が深いという記述にも合致することになる。しかも『吾妻鏡』ではそこを鶯越といっているのであり、つまり『吾妻鏡』でいう鶯越とは、現在地の鶯越(神戸市長田区・兵庫区・北区にまたがる地域)ではなく、鉢伏山や鉄拐山ということになる。そこは猪・鹿・兎・狐以外は通らない(つまり獣道しかない)険阻であり、そこから義経は「坂落とし」という奇襲で一ノ谷城郭を攻撃し、合戦に決着をつけたことになる。

宗盛の返書

ところで、一ノ谷合戦後、屋島に逃げ帰った宗盛のもとに捕虜となった重衡から勅定(朝廷の意志)を伝える書状が届く。内容は安徳と神器の返還を促すものであった。それに対する宗盛の返書が『吾妻鏡』二月二十日条に載っており、その日に京都に届いたという。その返書のなかに一ノ谷合戦を考えるために示唆的な記述が含まれているので、『吾妻鏡』にみえる一ノ谷合戦の一環として、ここで紹介しておく。

なお、この返書を『吾妻鏡』が二月二十日条に載せるのは、返書自体の日付が二月二十三日であることから間違いで、『玉葉』などと併考すれば、二十六日条か二十七日条に載せるのが正しい。

さて、返書のなかで宗盛は、平氏を「官軍」と位置付け、後白河に対して謀反の意志がないことを強調している。それどころか、還幸(安徳の帰京)しようとするたびに、軍勢を送ってそれを妨げている後白河をかえって非難している。還幸を妨げている軍勢とは義仲であり、今回の義経・範頼である。

考えてみれば、清盛がクーデターを起こして後白河を幽閉して院政を停止したのは事実である。しかし、その後の内乱の過程のなかで、平氏は謀反といえることは何もしていない。官軍として内乱の鎮圧に務めていたわけである。それが義仲に追われるかたちで都落ちすると、手のひらを返すようにたちまち賊軍とされてしまったのである。こう考えると、宗盛の主張にも一理あると考えられる。官軍か賊軍かはすべて朝廷(後白河)の思惑で変わるのである。

そして、返書には一ノ谷合戦の裏事情が記されている。それによれば、後白河から一ノ谷合戦前日(六日)に宗盛のもとに書状が届いた。それは、八日に御使(和平の使者であろう)を送るから、その御使が帰京するまでは合戦を起こさないようにという内容であり、そのことは関東武士等にも伝えてあるという。そこで、平氏はそのことを守り、またもとより戦闘の意志もなかったのも、御使の下向を待っていた。ところが、七日になって関東武士等が急に襲撃してきて合戦となり、官軍(平氏軍)の多くが討ち死にしたというのである。

宗盛は、関東武士等に院宣の内容が伝わっていないのか、伝わっていても武士等がそれを無視したのか、それとも後白河の策謀か、詳細を承りたいと強く抗議している。

追討か和平かで朝廷側にジレンマがあったことはすでにふれた。また、朝廷は実際に合戦前に和平の使者を送ろうともした。だから、後白河の書状は真実を伝えていたのかもしれない。逆に平氏を油断させるための策謀かもしれない。その一方で、合戦前に平氏はすでに一ノ谷に城郭を構えているし、また五日には三草山に軍勢を送っているわけだから、もとより戦闘の意志がなかったという宗盛の主張も必ずしも信用できない。結局、真偽は不明なのだが、ともかくも『吾妻鏡』によれば、一ノ谷合戦には、平氏と後白河の間で、このような裏事情があったらしいのである。

3. 『玉葉』と『吾妻鏡』の総合的解釈

『平家物語』

では、つぎに『玉葉』と『吾妻鏡』を、これまでふれたことや『平家物語』も使いながら、総合的に解釈してみよう。なお、『平家物語』には何十種類にもおよぶ異本があり、異本によって記述が異なる場合もある。そのため、一口に『平家物語』といってもどの異本を使用するかが問題となる。まずはその問題についてふれておきたい。

『平家物語』の異本を大別すると、琵琶法師の語りのテキストであった語り本系と、そうではない読み本系に分けられ、後者の方が逸話が多い。そのため、かつては語り本系に逸話を増補したのが読み本系と考えられ、読み本系は増補本ともいわれた。つまり語り本系よりも読み本系の方が後出本と考えられていたのである。

ところが、最近では、逆に読み本系をむしろ整理したのが語り本系と考えられるようになった。つまり語り本系の方が後出本というわけである。それをうけ、読み本系を逸話が多いことから広本系、語り本系を逸話が整理されていることから略本系とよぶこともある。

それぞれの系統の代表が、広本では延慶本であり、略本では覚一本という異本である。前者は現在では異本のうちでもっとも古態を示すと考えられている本であり、後者は、一般書店で手にすることのできるもっともポピュラーな『平家物語』である。そこでここでは、『平家物語』は延慶本と覚一本を中心に考えたい。なお、延慶本・覚一本ともに、一ノ谷合戦関係の記事は巻九にある。

両軍の軍勢と生田の森

まず両軍の軍勢は、『玉葉』・『吾妻鏡』ともに平氏は数万、一方の源氏は、『玉葉』では一方で一、二千騎であり、『吾妻鏡』では、範頼軍五万六千余騎、義経軍二万余騎とあり、大きな隔たりがあった。

源氏の軍勢は、延慶本では、範頼軍五万六千余騎、義経軍一万余騎、覚一本では、範頼軍五万余騎、義経軍一万余騎とあり、『吾妻鏡』に近い。つまり『吾妻鏡』や『平家物語』によれば、源氏の軍勢は平氏に匹敵するかそれ以上となる。

しかし、数万という軍勢の数は誇張に相違ない。これは『玉葉』にみる平氏の軍勢でも同様であろう。したがって、ここで軍勢の具体的な数を問題としてもあまり意味がないであろう。考えるべきは、対戦前の軍勢は、『玉葉』にみえるように平氏が優勢であったか、『吾妻鏡』や『平家物語』にみるように拮抗していたかであるが、その点はやはり『玉葉』を信頼すべきであろう。

ついで平氏の布陣とそれに対する源氏の動きを確認すると、『玉葉』によれば、平氏は、丹波城・一ノ谷(搦手)・浜地・福原(大手)・山手・島辺(経が島)に布陣していた。一方、源氏のうち大手の範頼軍は、浜地から福原を攻撃したという。しかし、『平家物語』によれば、範頼が攻撃したのは生田の森である。

現在、神戸市中央区の生田神社の背後の雑木林を生田の森と称しているが、そこがかつての森の名残であることは間違いないであろう。しかもこの地は、現在では埋め立てによって、当時よりも陸地が広がっているが、それでも海は近く、神戸市の東側ではもっとも陸地が狭い場所といえるし、しかも現生田の森の東側には明治初年まで生田川が流れていた。その下流に外国人居留地ができ、洪水被害を防ぐために、現在の位置に改変されたのである。

ということは、生田の森も、一ノ谷と同様に防衛施設を設置するのに最適の場所といえる。さらに生田の森の背後には、福原が控えており、『玉葉』とも矛盾しない。つまり範頼軍が福原を攻撃するためには、生田の森城郭を突破しなければならなかったのである。

義経軍と行綱軍の動向

これに対し、搦手の義経軍は、『玉葉』・『吾妻鏡』ともに、三草山(『玉葉』では丹波城)夜襲の後に、一ノ谷城郭攻撃へ向かう。その際に、『吾妻鏡』を解釈すれば、義経軍は、一ノ谷城郭の背後の鶴越に向かった義経率いる七十余騎、そこから抜け駆けして一ノ谷城郭の正面に向かった熊谷・平山、そして同じく一ノ谷城郭の

正面に向かった、安田義定が率いたと考えられる本隊に、三分割したと考えられた。つまり義経軍は、一ノ谷城郭を背後の山と正面からの二方向から攻撃して、攻略したのである。

そして、一ノ谷の後山を鶴越とする理解は、『平家物語』とも共通するが、『吾妻鏡』によれば、一ノ谷城郭は摂津と播磨の境にあり、このことは『平家物語』にもみえる。とすれば、一ノ谷城郭の位置は、現在の神戸市須磨区以外には考えられず、その後山という鶴越は、現在の鉢伏山や鉄拐山ということになる。この点は、延慶本で、「坂落とし」をするために義経が登った場所を「一ノ谷ノ上、鉢伏、蟻ノ戸」と記しているのと付合する。つまり『吾妻鏡』によれば、鶴越は現在地とは異なる位置となる。

一方、『玉葉』によれば、行綱軍が山方から寄せて山手を攻略したという。この山手というのは、神戸市北方の山側であることは間違いなからうが、具体的にどこを指すのかは、『玉葉』からはわからない。また、行綱がどのような行程で山手に向かったかも不明である。しかし、搦手に向かう義経軍と途中まで一緒であったのではなからうか。摂津源氏で現地の地理に詳しい行綱が、はじめての不案内な土地で、山中を搦手に向かわなければならぬ義経軍の道案内をしたと考えることは十分に可能であろう。この解釈が正しいとすると、義経軍は行綱軍を加えて、三草山合戦の後に四分割したことになる。

以上のように整理すると、特に義経軍は背後の山と正面の二方向から一ノ谷城郭を攻撃したと解釈すると、義経が一ノ谷を攻略したとする『玉葉』の記事と『吾妻鏡』の記事は何ら矛盾が生じないことになる。つまり義経は、鉢伏山・鉄拐山から一ノ谷城郭に「坂落とし」を行ったことになる。

「坂落とし」は虚構か

しかし、最近では義経の「坂落とし」についての否定的な見解が多い。つまりは『吾妻鏡』や『平家物語』の記述を虚構とみなすわけである。この虚構説の根底にあるのが、「坂落とし」という行為、つまり騎馬で断崖絶壁を降りることに対する疑念である。言い換えれば、騎馬で断崖絶壁を降りるのは無理だというのである。特に現在地の鶴越ならばともかく、鉢伏山・鉄拐山では険しすぎて無理だというのである。そこで、その点を検証してみよう。

まず注目したいのは、三浦義連である。『吾妻鏡』では、「坂落とし」を決行した勇士七十余騎のなかで特に三浦義連の名前が挙がっていた。義連は相模の豪族三浦氏の出身で、三浦郡佐原を拠点とし、そこから佐原義連ともいう。『平家物語』でも義経とならぶ「坂落とし」の主役は義連であり、鶴越を率先して落としている。

その際、義連は、覚一本では「三浦の方の馬場や」と言って落とす。また、延慶本では、まず畠山重忠が「我レガ秩父ニテ」は、鳥一羽、狐一匹を取るときでも「カホドノ岩石ヲバ馬場トコソ思候へ」と言い放って馬を担いで徒歩で降り、ついで義連が「三浦ニテ朝夕狩スルニ、是ヨリ険シキ所ヲ落セバコソ落スラメ」と言い、三浦一族とともに落とす。つまり義連や重忠は、鶴越のような峻険な場所で日常の狩猟を行っていた、言い換えれば、「坂落とし」のようなことは日常的なことというのである（狩猟が、弓射騎兵の日常的な騎射の訓練として最適なことは、本特集「合戦と武具」参照）。

むろん義連や重忠が実際にこうした言葉を口にしかたどうかは不明である。また、その言葉は「坂落とし」にのぞむ全軍を鼓舞する意味もあろうから、虚勢や誇張も含まれよう。しかし、義連の言葉は、三浦氏の本拠地であった現在の神奈川県横須賀市やその周辺の地形を考えれば納得がいく。横須賀市は平地が少なく、山（急傾斜地）ばかりであり、山すぐ海の地形が多い。JRでも、地元の私鉄である京浜急行でも横須賀に入るとトンネルばかりになる。

じつは筆者は横須賀生まれで、五十年近く暮らしている。自宅も山に囲まれているし、三浦氏の居館があったという衣笠城址に近い。現在でも城址に登っていく途中には、馬力の弱い車ではエンストしてしまいそうな急坂がある。鶴越のような場所で日常の狩猟を行っていたという義連の言葉は、筆者には実感として納得できるのである。これは重忠の言葉でも同様で、重忠の拠点である秩父の地形を知っている人ならば納得がいくであろう。そもそも日本全国で鶴越のような場所での狩猟は、珍しいことではなからうか。

さらに、戦争において騎兵の役割がいまだ重要であった十九世紀末から二十世紀初頭におけるヨーロッパのミリタリースクールでは、騎兵訓練の一環として、クロスカントリー乗馬と称し、「坂落とし」のような断

崖絶壁をはじめとする様々な障害物が立ちはだかる難コースをめぐる乗馬訓練を、毎日行っていたという。

その証拠写真をここで掲載はできないのが残念だが、この事実だけで、騎馬で断崖絶壁を降りることができるできないという議論そのものが無意味となってこよう。たしかにこれは現代の西洋の例である。しかし、洋の東西や時代を問わず、訓練(調教)次第で馬は何でもできるのである。

まして「坂落とし」は、陸上の交通手段を馬に頼っていた時代の話であり、武士の家に生まれた者が、幼い頃から武芸や騎馬の訓練をしないはずがない。当時の武士の乗馬技術は現在人の想像をはるかに超えて巧みだったはずである。その点でも義連や重忠の言葉は納得できよう。

以上から、騎馬で断崖絶壁を降りることは十分に可能であると考えられ、そのことへの疑念から「坂落とし」を虚構とみなす説には強く異義を唱えたい。「坂落とし」という行為は可能なのである。

4. 『吾妻鏡』の史料性と覚一本の位置

『吾妻鏡』の史料性

さらに「坂落とし」を考えるためには、『吾妻鏡』一ノ谷合戦譚の史料性を改めて問題にしなければならない。その際に重要になるのが、冒頭でより現実味があるとした『吾妻鏡』と『平家物語』の相違点である。具体的には、①義経が「坂落とし」の際に率いたのが七十余騎である点と、②安田義定の名前が出てくる点である。

まず①から考えよう。『平家物語』によれば、義経軍は一万余騎であり、「坂落とし」の軍勢は、延慶本では七千余騎、覚一本では三千余騎である。総勢そのものが誇張と考えられたが、「坂落とし」という奇襲作戦を行う軍勢としても、三千余騎やまして七千余騎はいくらなんでも多すぎる。

これに対し、『吾妻鏡』の七十余騎ははるかに現実的である。また、鉢伏山や鉄拐山に何千騎もの軍勢が通る道がないことも、「坂落とし」を否定する根拠のひとつとなっている。『吾妻鏡』でも鶴越には獣道しかないことになるが、七十余騎程度ならば、そうした道でも通れることになろう。

ついで②。『平家物語』では、義経が抜けた本隊は土肥実平や田代信綱が指揮する。これに対し、『吾妻鏡』から、安田義定が指揮したことが予想できた。たしかに実平や信綱は、義経に補佐役として付けられた頼朝の代官であるが、あくまで御家人である。それに対して、義定は甲斐源氏、つまり源氏一族であり、一軍の指揮を執る資格は充分にある。義経が抜けた本隊を指揮したのは、御家人である実平等よりも、源氏一族である義定と考える方が、むしろ説得力があると考えられる。本隊を義定に預けて、義経は「坂落とし」を行うのである。逆に本隊を指揮したからこそ、軍功者として義経・範頼とともに名前があがっているのであろう。

また、『吾妻鏡』二月十五日条によれば、義経・範頼等は、一ノ谷合戦後に、「合戦記録」なるものを鎌倉に提出した。こうした合戦記録は、合戦ごとに提出されていたものと考えられ、こうした記録をもとに『吾妻鏡』や『平家物語』の合戦譚は記されているという説もある。これは、『吾妻鏡』の一ノ谷合戦譚が『平家物語』に依拠しているという説の反論になろう。『吾妻鏡』と『平家物語』が似ているのは、この合戦記録のような共通の原史料があったからとも考えられるからである。

以上の諸点に、『吾妻鏡』にみえる義経の動向は『玉葉』と矛盾しない点や、断崖絶壁を騎馬で降りることが可能である点などを加味すれば、『吾妻鏡』一ノ谷合戦譚の史料性が再認識されるのであり、それを虚構とみなすことは躊躇されるのである。

覚一本の位置

しかし、ここで問題となるのが覚一本である。つまり覚一本によれば、三草山合戦敗北の報告を受けた宗盛は、越中盛俊・平通盛・平教経等を「山の手」(山手)に派遣する。延慶本では、盛俊はすでに山手に布陣していて、新たに教経等が派遣される流れであるが、三草山合戦後に教経が派遣された場所が山手であることは『平家物語』で共通する。

ところが、覚一本には、そこで「山の手と申は鶴越のふもとなり」という独自記事がみえる。そして、義経が「坂落とし」をするのは鶴越であり、「坂落とし」をした麓には、「山の手侍大将」盛俊が陣取っている。だから、これによれば、義経は「坂落とし」で山手を攻略したことになる。しかし、『玉葉』では、義経は一ノ谷を攻略し、山手を攻略したのは行綱であったから、この解釈は『玉葉』とは矛盾することになる。逆に覚一本の独自記事を生かして『玉葉』と合わせて考えると、実際に「坂落とし」を行ったのは行綱であり、それが義経の行為として置き換えられた可能性もでてくる。また、その場所も、現在地の鶴越である可能性が高くなってこよう。

ところが、覚一本には、「一谷のうしろ鶴越」という他の『平家物語』や『吾妻鏡』と共通する表現もみえる。これによれば、山手と一ノ谷は同じ場所になってしまう。しかし、それは大きな矛盾であり、覚一本は「坂落とし」の考察には使えないことになろう。となれば、現在地の鶴越で行綱が「坂落とし」を行ったという解釈

も、結局は「山の手と申は鶴越のふもとなり」という覚一本の独自記事から導かれるものだから、根拠が薄弱となり、その可能性はなくなってこよう。

おわりに

以上のように、一ノ谷合戦の文献史料、特に『玉葉』と『吾妻鏡』を分析・解釈する限り、「坂落とし」は、義経が現在の鉢伏山や鉄拐山から、一ノ谷城郭に対して行ったということになってくるのである。

編集者より 逆落としの場所はどこか

以上の原稿は、近藤好和氏による『玉葉』と『吾妻鏡』の文献資料を基にした、「逆落とし 須磨一ノ谷説」といえますが、逆落としの場所がどこかについては、須磨一ノ谷説や鶴越説など、未だに論争が絶えず、歴史的な興味の尽きないテーマです。

平家物語には、「鶴越の下の、越中前司 平盛俊の館めがけて逆落としをかけた」と記されています（平家物語巻9 坂落）。これだと逆落としの場所は鶴越ということになりますが、平家物語に「一ノ谷後の鶴越」と書かれ、鶴越の直ぐ下が一ノ谷と思えるところが、なぞを呼ぶ元になっています。神戸市の中で須磨区の一ノ谷と兵庫区の鶴越とはずいぶん離れているのです。

平家物語では一ノ谷合戦は、東木戸を生田の森とする以西の神戸市街全体で戦闘がくりひろげられています。安徳帝は海上の御座船におられたようです。西木戸や主戦場一ノ谷の場所については説が分かれています。

落合重信氏の「神戸の歴史」(昭和50年刊)によれば、1184年2月7日午前6時、平家の陣の東西の木戸めがけて源氏の「一斉攻撃が開始されたが、平氏の軍もよく守り、勝負はなかなか決しそうになかった。そうした中で、鶴越を下った義経が、通盛・教経・盛俊の守る山の手を破って、中央突破を敢行する。これによって、平氏の陣はたちまち浮き足立ち、…2-3時間で源氏の大勝利に帰した。」…「なぜ、この戦いが一ノ谷合戦と呼ばれるのか。…一ノ谷が主戦場であったからという説。一ノ谷というのはもっと広い地域を指したという説 等がある。…京出発の時から義経に人気があり、義経が一ノ谷に向かうというので…一ノ谷合戦と京で言いならされたのではなかろうか。」としています。

一ノ谷というのはもっと広い神戸市街地全体の地域を指したという説には、田辺真人氏などがおられません。

あなたも、この歴史ミステリーを考えてみて下さい。